



東方友誼

鹿児島市日中友好協会

設立20周年を迎えて



鹿児島市日中友好協会 会長 海江田 順三郎

鹿児島市日中友好協会は昭和60年に設立、活動して参りましたが、今年20周年を迎えることができました。これも皆様方の暖かい御支援の賜物と深く感謝申し上げます。

今回20周年をひとつの節目としてさらに友好協約都市、中国長沙市はもとより上海、北京その他多くの中国の皆様方と交流が出来ます様に努力したいと思っております。

去る4月8日、王毅中華人民共和国駐日本国大使をお招きして鹿児島サンロイヤルホテルで記念講演を開催致しました。お話を拝聴致しまして政治、経済、文化を交えながら私たちの次世代へ残す交流の歩みは大切な一歩の積み重ねと実感致しました。

1972年の日中国交回復により、日中両国は対等のパートナーとして、善隣友好の新たな時代に入りました。ところで最近になり、「政治冷戦」といった政府間の関係悪化が憂慮されておることはご承知の通りであります。

私たちはこのような時こそ、地方レベル、民間レベルで、日中友好のネットワークを築き、日中両国民の友好と、相互理解に努め、アジアの安定繁栄、引いては世界の平和に寄与したいものと思っております。

また鹿児島に在住されておられる多くの中国の方々に微力ながら支援体制を整えて、さらに深く交流が出来ますことを念頭に進んで参りたいと思っております。

今後とも皆様方の暖かいご支援とご協力を心からお願ひ申し上げます。

◆鹿児島県日中友好協会が発足◆6月16日



鹿児島県日中友好協会が六月十六日、発足した。来賓として伊藤祐一郎県知事、武田明駐福岡総領事、佐藤嘉祐(社)日中友好協会会長代理、酒井誠同常務理事・事務局長が出席した。伊藤県知事は「民間、経済界、大学を中心とした県協会の設立を契機に、県としても中国との交流促進と友好関係発展をはかりたい」と期待を表明。武田総領事は「県協会の発足は大きな出来事。厳しい環境の中での発足は意義深い」と高く評価し、激励した。

総会では、県全域の民間活力を生かし「経済や文化、教育、スポーツなどで交流をすすめる、相互理解と友好親善を図ること」をうたった設立目的を承認した。また、今年度の事業として、県内の3市協会や経済団体、大学などと連携し、中国側と情報交換しながら、観光客誘致や留学生支援などの方策を探っていくことを決めた。

初代会長には、発起人代表で鹿児島市日中友好協会の海江田会長を連任。伊藤県知事は名誉会長に就任した。

続いて行われた記念講演会では、(社)日中

友好協会の佐藤会長代理(写真)が「日中関係をどう見るか」と題して約1時間にわたり講演した。設立記念懇談会には中国留学生も招かれテーブルごとに交流を深め、発足を祝った。



写真=出場者とスタッフの集合写真



写真=最優秀賞：ジョン・ヒョンドン(慶應体大大学院・韓国)

- 最優秀賞：ジョン・ヒョンドン
(目に見えないものに目を向ける)
- 優秀賞：宋 東
(人生とは何でしょう)
- 優秀賞：鼓 淑梅
(老人施設で実習して)
- 日中友好協会賞：孫 瑛英
(日本人の気配り)
- 南日本新聞社賞：ミヤ・マリナ・ミヅ
(感謝)
- 審査員特別賞：北川 容子
(日本とアメリカの学校生活の違い)
- 審査員特別賞：朴昇用
(私達は友達になれる)
- 日中友好協会特別賞：丁雪輝
(御 殿)

第十回 外国人によるスピーチコンテスト入賞者

外国人による日本語スピーチコンテスト「鹿児島で世界を語ろう」第十回外国人による日本語スピーチコンテストは平成十六年十二月十八日に鹿児島県自治会館ホールで行われた。

県内に住む七カ国出身の十六人が、生活の中で感じたことや意見などを、約五十人の聴衆に語りかけた。日本人が気付かない指摘に会場はしきりにうなずき、通者な日本語に盛んな拍手を送った。最優秀賞には「日本人が失いかけている敬老孝親の心」に熱れ、書道の余白にたとえて「目に見えないものの大切さ」を訴えたジョン・ヒョンドンさん(韓国)が選ばれた。

第十回 外国人による日本語スピーチコンテスト

「鹿児島で世界を語ろう」

両国の交流拡大を

王毅中華人民共和国駐日本国大使の講演

四月八日、中国の王毅中華人民共和国駐日本国大使が鹿兒島市のサンロイヤルホテルにおいて、今後の日中関係について、講演を行いました。両国間での地域レベル交流の拡大を訴えた。講演は県、市など7団体の主催で鹿兒島市日中友好協会が設立20周年記念で企画した。王毅中日大使はおおよそ40分にわたる講演をすべて日本語で行った。

王毅中日大使は、鹿兒島と中国の交流の現状について、県内企業の中国進出は13社に留まり、中国の海外旅行者2800万人のうち訪日したのは70万人、うち鹿兒島県は2000人だったとデータを提示し、鹿兒島の観光(温泉、食材など)をメーンに交流を呼びかけた。王毅中日大使は、海の協力を強めることが(が大切)だ。鹿兒島県は海に面している。海の協力を鹿兒島県はぜひ重視していた。小泉(純一郎)総理は東中国(シナ)海はぜひ平和な協力の海にしたい、と(言っている)。中国側も同じ考え方を持っている」と述べた。また、一九七二年の日中共同声明に「日本国が過去の戦争において中国国民に対し多大な損害を与えた責任を痛感し深く反省する」との文



言が盛り込まれていることを指摘。「国交正常化三十三年になり、大きな前進があったが、時々問題も発生した。そのほとんどが歴史と対話の問題がある。共同声明の約束をきちんと守ればどんな問題でも対話を通じて解決できる」と語った。

日中友好を考える

民間の力で地道な積み上げを

江西省九江学院大学日本語教師

池田 公榮



相互利益、相互友好のためには多少の来者不拒清濁併飲の度量があつて然るべきと思うが、現今の国家間日中関係は、一衣帯水の状況にあるにも関わらず、温経冷政の状態である。国家ともなれば、相互に友好の必要性は感じつつも、利害や面子が先行し、うまく進まないのであらう。それはそれとして、日中両国の外交推移を前向き積極的に見守ることにしたい。

このような時だからこそ、民間友好団体や個人レベルでの友好活動が推進されるべきだと思う。以下、私が自ら体験し、見聞したことを通し、所見を述べてみたい。私は2004年以来、中国江西省九江学院大学①において日本語話と日本概況を教えている。戦前、九江で生活したことがきっかけで、老後を余生としてではなく、与生(目的をもって与えられた生活)として生きたいと願い、ある帰国中国人のお世話で、九江学院の教壇に立つこととなった。学生は勿論、現地住民ともよい関係で、毎日楽しく、充実している。

私と同じような生き方を中国で行ってこられた先輩や、同志が多数いらっしゃるということも次第に分かってきた。



また、留学生として九江学院に長期滞在し、中国の文化や芸を学んでおられる方も段々増えている。一例をあげるなら高田九江友好会②は退職者等が現地中国で文化、書法(道)、水墨画等の学習ができるように大学側と契約を結び、希望者を入学させる事業を展開している。実際、この高田者たちは、日本の成人教育の高齢者学級生よりよく、目は生き生きと輝き、とても楽しいとおっしゃっている。

すでに、日本語教師を派遣しているのが鹿兒島市日中友好協会も、長沙市との間に、探せばもっと多様な交流の道が開かれるのではないかとと思う。いかに頑丈な山でもつるはしひとつでコツコツと掘り進んだ「青の同門」の話は日中友好を願う者にとって励みとなるであろう。「求めるものは得、探すものは見出し、門をたたくものは開かれん」③である。

註 ①中国江西省九江学院大学：国立大学、18学部、学生3万7千人、教職1600人の総合大学。②高田九江友好会：奈良県大和郡高田市(人口7万5000人)会長根根修弘氏、友好都市盟約以来18年間人脈往来継続。③マタイ福音書7章7節

投稿者略歴 1933年生。熊本県天草出身。幼少時九江在住。引き上げ後鹿兒島県川内在住。大阪聖書学院神学士課程、玉川大学文学部教育学科(通信)に学ぶ。2004年まで46年間種子島西之表を中心にキリスト教布教と牧会、福祉、教育事業に(基督教幼稚園、明朗幼稚園、わかさ保育園経営)に携わる。2004年8月より現九江市在住。